

【対象と方法】我々の施設と関連病院で見られた、炎症性偽腫瘍9例、反応性リンパ過形成2例、非定型的リンパ組織過形成2例、悪性リンパ腫11例の合計23人である。男性10人、女性11人で、年齢は33～84歳までで、平均61.3歳、いずれの症例も病変が外眼筋に及ぶものを対称とした。

【結果】MRIにおいて、外眼筋付着部と外眼筋の形態を調べた。炎症性偽腫瘍より悪性リンパ腫の方が外眼筋付着部が厚く、肥厚の形態も異なっていた。病変のある外眼筋と正常外眼筋の信号強度を比較したところ、悪性リンパ腫では、ほとんどがT1強調像、T2強調像で高信号を示した。炎症性偽腫瘍では、造影効果がさまざまで、他の疾患との鑑別は困難であった。病変の数は悪性度が高くなる程増加傾向が見られた。

【結語】悪性リンパ腫の外眼筋病変の肥厚の形態は炎症性偽腫瘍のそれとは異なる。殆どの炎症性偽腫瘍の症例で病変の存在は1ヶ所であり、リンパ増殖性疾患の場合は悪性度が高くなるにつれ、病変の存在部の数が増加する傾向が見られた。信号強度と、造影効果も有用であると思われた。

#### PC-65.

#### ぶどう膜悪性黒色腫における<sup>123</sup>I-IMP SPECTの診断的意義の検討

(眼科学)

○後藤 浩, 外間英之, 白井正彦

(放射線医学)

梅田淳一, 石井 巖

【目的】放射性医薬品 N-isopropyl-p-[<sup>123</sup>I]iodoamphetamine(<sup>123</sup>I-IMP) を利用した核医学検査のぶどう膜悪性黒色腫における診断的意義を検証するとともに、病理組織学的所見との比較検討を行なった。

【対象と方法】臨床的にぶどう膜悪性黒色腫もしくは眼付属器悪性黒色腫が疑われた20症例に対して、<sup>123</sup>I-IMPを静注後2時間および24時間後にsingle photon emission CT (SPECT) 検査を施行した。陽性症例では集積部位をROIで囲み、pixel当たりのシンチレーション値を測定して集積の半定量化を試みた。治療目的に眼球摘出術が行われた悪性黒色腫症例に対しては腫瘍の組織型、色素の多寡、眼外浸潤の有無等を検索し、<sup>123</sup>I-IMP SPECT 検査結果と比較検討し

た。

【結果】<sup>123</sup>I-IMP SPECT の晩期像で陽性所見を示した9症例のうち、8症例は病理組織学的に脈絡膜悪性黒色腫であることが確認された。疑診例、すなわち虹彩母斑、脈絡膜母斑、脈絡膜血管腫、転移性脈絡膜腫瘍、視神経乳頭黒色細胞腫などではいずれも<sup>123</sup>I-IMP SPECT は陰性であった。ぶどう膜悪性黒色腫の腫瘍サイズ、組織型、色素の多寡等と<sup>123</sup>I-IMP SPECT 所見との間に有意な相関は認められなかった。

【結論】<sup>123</sup>I-IMP SPECT はぶどう膜悪性黒色腫の診断において感度、特異度ともに優れた検査法であることが示された。しかし、<sup>123</sup>I-IMP SPECT 所見から腫瘍の組織像を推察することは困難と考えられた。

#### PC-66.

#### 後腹膜奇形腫の一例

(霞ヶ浦・放射線医学)

○橋本剛史, 小竹文雄, 斎藤和博

(霞ヶ浦・外科学第四)

後藤悦久, 田淵崇文

(放射線医学)

伊藤直記, 阿部公彦

症例は25歳女性。平成10年12月、上腹部痛を主訴に近医受診。エコーにて脾臓背側に石灰化を伴う充実性腫瘤を指摘され、腹部CTにて後腹膜腫瘍が確認された。平成11年1月中旬に精査目的にて当院外科に入院(第1回目)となる。画像診断上、腫瘤は石灰化と脂肪成分を有し、後腹膜発生奇形腫が考えられた。造影効果呈する充実成分は認めず。平成11年4月に手術目的にて第2回目入院となる。術前腹部血管造影にて、腫瘍は周囲血管の圧排所見を主体とし、明らかな腫瘍濃染は認めなかった。以上より良性後腹膜奇形腫の診断のもと腫瘍摘出術が施行された。腫瘤は周囲と癒着が強く、一部の上腸間膜動脈周囲神経叢との癒着強い部位は剥離不能であった。術前CTの見直しにても腫瘤と上腸間膜動脈根部とは広く接し、術前診断での腫瘤と神経叢間の癒着の可能性の指摘が必要であったと思われた。摘出物の病理学的検索にて内容物には脂肪、毛髪、骨・軟骨成分、脳組織様成分、円柱上皮様成分が含まれており、明らかな悪性所見は認めず Benign teratoma と診断された。術後23日目に軽快

退院となる。後腹膜発生の奇形腫は頻度的に稀であり、また治療法としては外科的切除が唯一の方法である。CT, MRI・エコーおよび血管造影検査などの画像診断は良悪性を含めた腫瘍の質的診断のみでなく外科的切除に際しての進展範囲, 周囲脈管との関係などの把握に有用である。また, 今回のような症例にては, 周囲神経叢との関係も含めた画像診断時の評価の必要性があると考えられた。

### PC-67.

#### 患者情報データベースシステムの構築と運用

(薬理学・難治研センター創薬部門)

○外山由夏, 松宮輝彦

【背景・目的】東京医科大学病院では, 病院情報システムが導入され診療業務に活用されている。薬理学講座では, 病院内に蓄積された患者基本情報や薬歴, 検査値, 病名等のデータから, 薬剤の治療効果を高め, 薬剤によって惹起される有害反応を最小限に抑えるための情報を引き出し, 医師および患者のために生かすことを考えた。

【方法】薬理学講座内において「患者情報データベースシステム (DB)」を構築した。医療情報センターの協力により大学病院にあるホストコンピュータから抽出していただいたデータを「仮データ」とし, DB への移行作業を行った。

仮データを用い, DB のセキュリティや検索機能, 薬歴や検査値等のグラフ化など, ソフトウェアの仕様についての検討を行った。

【結果】セキュリティ対策として, スタンドアローンでの構築やパスワードによるアクセス制限, 氏名のイニシャル変換等を行った。

個々の患者における薬歴や検査値等の経時変化がグラフ化して見られるだけでなく, 複数の患者のデータについてもグラフ化ができるよう仕様を検討した。

検索機能については, 病名や薬剤名 (商品名, 一般名) 等を用いた抽出, 絞り込み, 並べ替え, 集計等, 種々の機能が可能となった。

【考察】ソフトウェアの仕様についてはまだ改善・検討の余地はあるものの, 概ね DB の構築は完了し, 薬理学講座内に構築した DB 内においてレトロスペクティブな調査・研究が可能になったと考えられる。

今後は, 仮データではなく本データの DB への移行に着手し, 薬剤の適正使用をはじめ臨床現場に役立つ調査・研究に取り組んでいきたい。

### PC-68.

#### 核医学ローカルネットワークについて

(放射線部)

○広瀬秀治, 平山邦彦, 梅田淳一, 中曽根憲治, 吉井理美

【目的】東京医大においても院内情報システム・放射線科情報システムがすでに稼働し, 日常業務に活用されているが, 必ずしも必要とされている部署にその要求を満たすサービスがなされているとは言い難い。核医学ではそれらのシステムとは独立したネットワークを構築することで, 必要なサービスを利用者に使いやすい形で提供し, 本来の業務である画像処理までもサポートできる環境の構築を目指した。

【方法】96年4月, 核医学に自作 Windows 95 パソコンを持ち込み, OS 付属の LAN 機能を用いて簡単なネットワークを組んだ。98年5月, サーバーの信頼性の関係から Windows NT サーバーを導入, さらにクライアントとしてノートパソコンを用意した。ファイルメーカープロのデータファイルサーバーとして Windows NT サーバーを, メール, HTTP, DNS サーバーに Linux を使うことによって, ハードウェア以外のトータルコストを削減しつつ, 核廃棄物管理, 患者情報サービス, ガンマカメラとの画像送受信および, 検査データ加工処理に活用できる環境を構築した。

【結果】患者情報の電子化により, 過去データの検索スピードが上がり, 写真の再提出など労力が激減した。核医学内でメールのやり取りできるため重要事項の連絡ミスが減った。また検査機器との接続により, SPM, p-FAST など新しい画像解析法に対応できる可能性も広がった。今後, セキュリティの問題が解決できれば, 学内 LAN との接続を通して核医学情報の転送や, フェージョンなどの, 他の放射線機器画像との相互利用を目指したい。